

## 2. IT・ロボット技術の利用方法の検討

### (1) 研究開発の動向

ア. 「ロボット政策研究会」による展開予想



2005年に経産省主導で行われた「ロボット政策研究会」(委員長 三浦宏文 工学院大学学長)の中間報告書～ロボットで拓くビジネスフロンティア～の中で、10年後のネオ・メカトロニクス社会の展開予想として、各種のサービスロボットの出現を想定している。

左の図は、その中の医療・介護福祉施設関連部分の抜粋である。

そこで提案されている機能で「元サラリーマン高齢者」がコミュニティに参加しやすくする、といった視点では「話し相手」などがあげられる。

図表一6 10年後のネオ・メカトロニクス社会の展開予想(医療・介護福祉施設関連の抜粋)

イ. 「聖アンナ高等研究院（ピサ、イタリア）」における

### IT・ロボット技術を使用した介護施設の研究

イタリアは、従業員一人当たりのロボット使用台数では、世界4位（109台、2002年、United Nations Economic Commission for Europe, UNECE）であり、世界1位日本（308台、2002年）を除き、2位ドイツ（135台、2002年）、3位の韓国（128台、2002年）と並び、ロボットの活用が進んでいる。

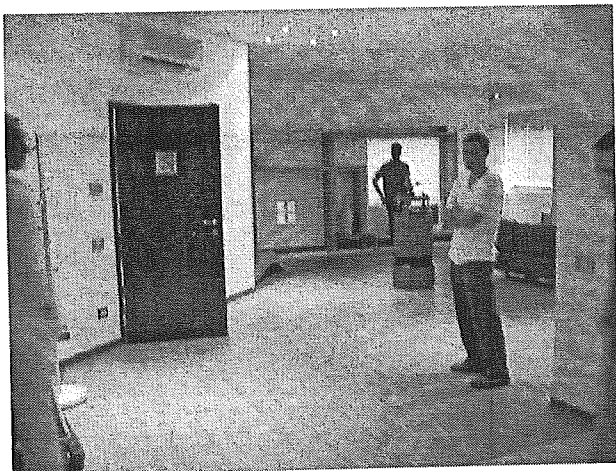
また、イタリアを代表する国立の研究機関であり、ガリレオの活動拠点であった



図表－7 Peccioli 地区の研究開発拠点

ことから今でもイタリアの科学技術の中枢を担っているピサ地域にある、聖アンナ高等研究院（大学院大学）はEUレベルでも先進的な医療・介護福祉機器に関する研究開発を行っている。

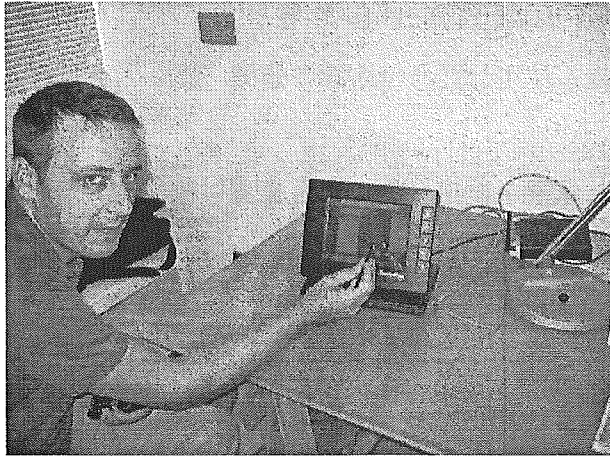
同研究院の本部はピサ市内にあるが、研究開発拠点はピサ郊外の Pontedera 地区および Peccioli 地区にある。



図表－8 Peccioli 地区研究開発拠点での「介護福祉研究モデルルーム」

聖アンナ高等研究院は、厳しい入学試験をくぐりぬけてきた学生に、授業料および寮費を全て免除し、勉強と研究だけに専念できるよう徹底した環境を用意している、イタリアでも1・2を争う有数の研究拠点とされている。

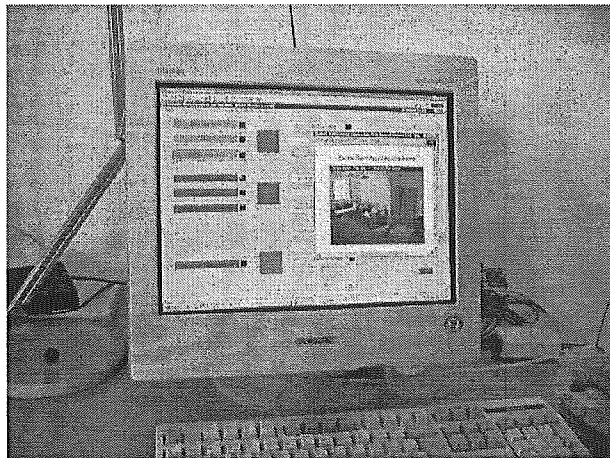
Pontedera 地区の研究開発拠点は、世界3位のスクーターメーカー Piaggio の工場に隣接しており、Peccioli 地区はさらに郊外の豊かな田園地帯にある。



図表— 9 Peccioli 地区研究開発拠点での  
「遠隔モニタ・制御システム」制御パネル

左は、コミュニティや家族が、高齢者の見守りや家の中のドア開閉などを、遠隔で行うためのシステムである。

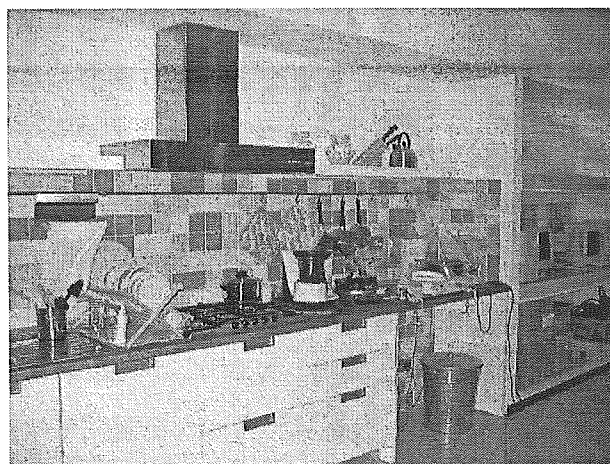
タッチスクリーン方式の制御パネルで、遠隔で行う機能をメニューから選択し、実行する。このシステムは実際に Peccioli 地域の住宅に設置され評価試験が行われているようである。



図表— 10 Peccioli 地区研究開発拠点での  
「遠隔モニタ・制御システム」制御サーバ

また、左はそのシステムの制御サーバで、システムの実行状況および遠隔で制御している住宅の中の状況がモニタ画面に表示されている。

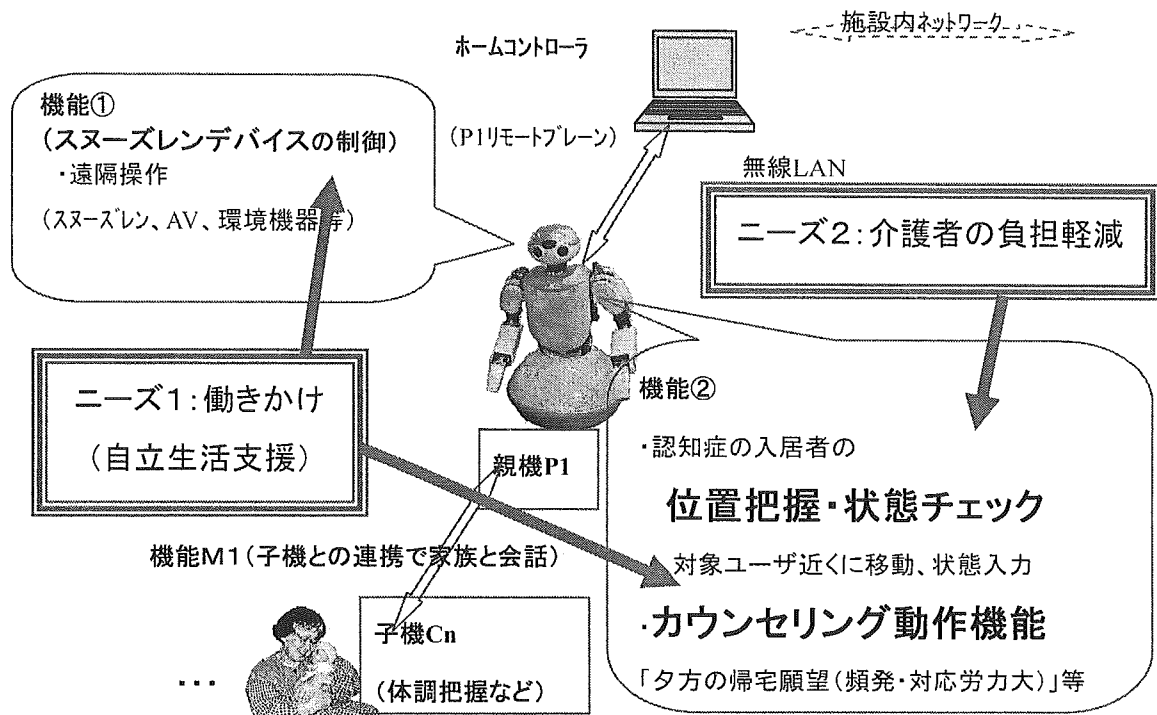
同種類の研究は、日本では産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センターなどで行われている。



図表— 11 Peccioli 地区研究開発拠点での  
「モデルルーム内キッチン」(本格的!)

さらに、見守りから一歩踏み込んだ具体的な介護支援として、食事支援の機器の研究開発が行われている。機器の開発内容は、関係者外秘であり記載できないが、キッチンを本格的にモデルルーム内に設置し、ネットワーク経由で遠隔制御も目指すなど、実用的かつ先進的な研究内容である。

(2) 介護・福祉施設での利用方法



図表—1 2 介護・福祉施設での利用方法事例

(ロボット“MAPLE”の写真: 三菱電機㈱提供)

上の図は、介護・福祉施設でヒアリングしてまとめた、要望機能のうちの一部である。本報告書の最終目的でもある「元サラリーマン高齢者」のコミュニティ参加を促す目的とは異なるため、詳細の説明は省略するが、「介護者の負担軽減」のニーズとともに、「入居者への働きかけ(自立生活支援)」が重要と、強く指摘されている。

(3) 「大都市近郊の高齢者」のための利用方法

地域・家族から「浮いた」存在となっている「元サラリーマン高齢者」や、福祉施設の入居者に働きかけ、コミュニティに参加するきっかけを作り、コミュニティで楽しむためのソフト的支援を行い、それらが介護予防・認知症予防となること、また基本的な生活習慣の改善となる<ステージ3: ネットワーク、コンテンツ>レベルの利用方法を検討することが重要である。

イタリアの高齢者が、週5日以上都心に出かけ、老人クラブなどグループで楽しむことが非常に多いなどの調査結果を参考に、下記のような指標をもとに「コンテンツ」を

開発し、IT・ロボットシステムに「楽しみながら介護予防・認知症予防ができるコミュニティ参加促進のメニュー」として搭載することを、今後検討して行く。

- ① ユーモア： 家族や友達に冗談やほめ言葉を言っているか
- ② コンサルティング： 家族や友達の相談事への対応度
- ③ ファッション： 衣服や装飾品への関心
- ④ アート： 関心や頻度
- ⑤ ゲーム： 熱中することがあるほど好きか
- ⑥ ホビー、スポーツ： 熱中してできるものがあるか
- ⑦ 仕事中毒： 仕事が最大の目標となっていないか
- ⑧ 結婚・恋愛： 熱烈な体験があるか
- ⑨ ペット： 自分で飼うほど、可愛いと思うか
- ⑩ 花： 育てるのが楽しみか

(朝日新聞2005年11月28日、20面 掲載記事、

浜松早期痴呆研究所長の金子満雄院長が東海大学と共同開発した

「感性度テスト」から抜粋、一部表現を変更)

## 参考文献

- [1] 象印マホービン株式会社「ニュースリリース」, 2006, <<http://www.zojirushi.co.jp/corp/news/2006/0626/index.html>>
- [2] 松下電工インフォメーションシステムズ(株)、ナイス・ロケーションシステムズ(株)「みまもりネット」, 2006, <<http://www.mewloc.jp/mimamori/>>
- [3] 早稲田大学 理工学術院 機械工学科 高西研究室「WL-16RII」, 2006, <<http://www.takanishi.mech.waseda.ac.jp/>>
- [4] PARO[パロ], 2006, <<http://paro.jp/>>
- 独立行政法人 産業技術総合研究所「プレス・リリース」, 2004, <[http://www.aist.go.jp/aist\\_j/press\\_release/pr2004/pr20040917\\_2/pr20040917\\_2.html](http://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2004/pr20040917_2/pr20040917_2.html)>
- [5] A.Kabe, A. Kakimoto, T. Kase, Y. Yokota, N. Nagasawa, E. Kato, H. Watanabe, *A Preliminary Study of Biofeedback System based on "Snoezelen: Stimulation of Senses" Devices and Robots*, Japanese Journal of Biofeedback Research, 2006, in-print

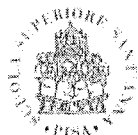
## 第6章 イタリアにおける都市近郊地域の 高齢化と高齢者の生活実態

### 1. はじめに ー本研究の目的と内容

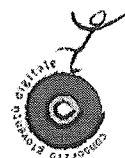
本研究は、仕事中心のネットワークから切り離されて家族・地域から「浮いた」存在となっている「元サラリーマン高齢者」が、多様で多層的なネットワークを構築して、充実した生活を送りコミュニティに参加するよう促すため、高齢化のスピードが似る欧州各国でどのような支援策をとり具体的な内容を持っているか、明らかにしようとするものである。特にドイツ（16年度）およびイタリア（17年度）で、各国の研究機関の協力を得て実態調査を行った。その結果、大都市近郊で産業的要因などから特定地域で高齢者が多い地域があることが分かり、ドイツ・ドルトムント市、イタリア・ローマ市の事例を得ることができた。特にイタリア・ローマ市では、日本・所沢市および多摩市で実施した「都市近郊居住高齢者等に対するアンケート調査」（以下「高齢者調査」という。）質問票のイタリア語版を用意し、イタリアの代表的研究機関である聖アンナ高等研究院（国立の大学院大学）などの協力を得て行った。

### 2. イタリアにおける高齢者の生活実態

#### (1) 参加研究機関



Comune di Peccioli



#### (ア) Scuola Superiore Sant'Anna di Pisa

イタリア聖アンナ高等研究院(国立の大学院大学：Pisa, Italy)

イタリア側取り纏め

Prof. Giuseppe Turchetti

#### (イ) l'Amministrazione Comunale di Peccioli

ペッチョリ市役所（トスカーナ地方のピサ近郊の小都市、比較的豊かな地域）

(ウ) University Campus Bio-Medica di Rome

バイオメディカル関連の大学（エンジニアリング部門、メディカル部門）

(エ) Consorzio Gioventu Digitale

デジタル青年協会（ローマ市におけるITプロモーションのコンソーシアム）

(2) 調査比較事例 —日本 v s イタリア—

日本とイタリアの違いが明らかになった事例として以下があげられる。

(ア) 「誰に主に介護してほしいか」

	日本	イタリア
配偶者	50.7%	47.1%
同居中の子供	6.5%	9.8%
<u>別居中の子供</u>	<u>8.6%</u>	<u>20.4%</u>

まず、別居中の子供に介護して欲しい割合が、日本8.6%に対しイタリア20.4%と高い。これは、イタリアでは60歳以上の80%の人が同じ市内に最低一人の親族が居住し、そのうち40%は至近距離、また半径1キロ以内に子供が居住しているのは高齢者夫婦のみ世帯で48%という<sup>1)</sup>、家族が近隣に住むとの環境が寄与していると考えられる。

日本は、辞令でどこでも赴任するという人事システムが主流であるが、それが多様で多層的なネットワークを地域に構築することを阻害する要因になり、子供が親の近隣に居住していないため介護して欲しい対象者としての割合が低いと考えられる。

(イ) 「都心への外出頻度」

	日本	イタリア
<u>ほぼ毎日</u>	1.4%	<u>38.8%</u>
<u>週5日以上</u>	0.8%	<u>4.4%</u>
<u>1-3日/月</u>	<u>32.3%</u>	10.0%
1日以下/月	38.2%	11.6%

都心へ出かける頻度も、ほぼ毎日と週5日以上を合わせて、日本2.2%に対してイタリア43.2%と圧倒的に多く、一緒に行く相手も、日本では「一人で：40.8%」に対してイタリアでは「配偶者：41.2%」である。

(ウ)「外出の際の相手」

	日本	イタリア
(都心) <u>配偶者</u>	21.8%	<u>41.2%</u>
<u>一人で</u>	<u>40.8%</u>	23.5%
(近所) <u>配偶者</u>	20.7%	<u>31.9%</u>
<u>一人で</u>	<u>68.6%</u>	35.8%

(エ)「最近1ヶ月におこなった活動」

	日本	イタリア
<u>個人での趣味</u>	<u>55.2%</u>	11.6%
集団での趣味	31.4%	17.8%
<u>老人クラブ</u>	7.9%	<u>27.1%</u>

さらに、最近1ヶ月に行った活動として、日本では「個人の趣味：55.2%」に対してイタリアでは「老人クラブ：27.1%」と、グループで楽しむことが非常に多く、暮らしに対する姿勢や工夫が大きく寄与していると考えられる。

(オ)「携帯電話の使用状況」

	日本	イタリア
<u>週5日以上</u>	5.4%	<u>29.0%</u>
<u>週3-4日</u>	7.4%	<u>18.8%</u>
<u>持っていない</u>	<u>66.0%</u>	15.4%

これは、携帯電話の使用状況からも読み取れる。日本では「持っていない：66%」に対して、イタリアでは「週3日以上使用：47.8%」であり、イタリア人が他の人と繋がっていたい、という社会的欲求を示している。



(3) 調査報告 ー翻訳版ー

## **La qualità della vita di soggetti anziani nelle grandi città e nei piccoli paesi: uno studio comparato sui bisogni dei cittadini in Italia ed in Giappone**

大都市および地方村落における高齢者の生活の質：イタリアと日本における市民の需要についての比較研究

### (ア) はじめに

ピサ市聖アンナ高等研究院によりイタリアで始められたプロジェクトには、ローマ地区について、バイオメディコキャンパス大学とデジタル青年協会が、ピサ地区について、ペッチョリ市役所(ピサ県)が参加した。

調査は2005年12月から2006年3月までの期間に行われ、ペッチョリ市(ピサ県)の田園地帯、ならびに、ローマの都市圏および近郊の複数の地区の住民が対象となった。

調査地域の選択理由に触れておくと、地理的、形態的、人口統計的に非常に異なる二つの現実を選ぶことで、高齢者の生活特質を概括的に展望することができると考えた。

実際に、ローマのような大都市と、高齢者が必要とするものとそれによって生じる機会に対して注意を払っている団体、施設、組織、協会間の相乗効果を示す唯一の例であるペッチョリのような地方都市との間にある、相違点、類似点、存在する問題点を分析することで、二つの地域の比較対象をおこなうことが可能となった。

ここ数年のうちに高まるであろう高齢者の潜在能力を十分に活用し、かつ、大都市近郊や地方小都市における彼らの積極的な役割を促進するためには、今日まで存在していたものとは異なる関係とサービスのネットワーク構築を支援しなくてはならない。

ISTAT(政府統計局)の計算によれば、2001年のイタリアにおける65歳以上の人数は、約1050万人(イタリア人の18%)を数えており、2006年には、約1150万人になると計算されている。

新しい人生の自由な選択、従事する値打ちがある新しくまた楽しい活動の試みる時間としての、非常に肯定的な意味で「第三の人生」という概念が現れつつある。

高齢者にとって重要なのは、活動的で怠惰にふけらないこと、人間関係を広げること、要するに、周辺にとどまり無用な人間と感ずることがないよう「ゲーム参加する」である。

社会的、文化的、そして、リクリエーション的な出会いの場の代表するのは、地区や区画ごとにある地域のサービス施設、「高齢者社会センター」である。当施設は、地域に住む様々な年齢の人たちの間の、文化的また社会的な交流の媒介として設置されているもので、実際そのように機能している。要するに、すでに存在する社会的施設（多目的社会センター、図書館、読書室など）を補完するものである。センターのサービスは、地方分権および参加の思想に着想を得ており、高齢者の要求に継続的によりよく応えていくために機能している。

センターでの活動への参加は、センターのある地区に在住・在勤のすべての高齢者に開かれている。

高齢者社会センターに登録できるのは、

- a) 年齢55才以上の人
- b) 年齢50才以上で、直接または間接の年金受給者
- c) 年齢45才以上で、70%を超える障害をもつ人

#### (イ) リサーチの方法

アンケートの配布は、12月に、ローマ地域において、いくつかの都市小区画に存在している高齢社会センターおよび学校（高齢者がインターネット講習に通っている）で始められた。デジタル青年協会が各センターと連絡を取り、面会日時を決定した。アンケートの趣旨と内容は、集団説明会の際に住民に説明した。作業員がリサーチ参加者のアンケート記入の補助を行った。

ペッチョリの田園地帯では、ローマとは異なる方法がとられた。

ミゼリコルディア協会と地域の勤労年金生活者労働組合を通じて、150のアンケートが、高齢者の住宅に配布された。

返却には2度の機会がありその際には回答者は質問して説明を求めることができた。

### (ウ) 調査の結果

以下では、分析した二つの地区、大都市圏と地方の小都市における現実に関する集計データを分析し、表を用いて概略的に示す。類似点と相違点を明確にすることで、二つの地区がもつ特殊性を調査することができるだろう。

#### サンプルデータ

調査人数は 320 人で、そのうち、ローマの複数の区域の居住者が 236 人、ペッチョリ市（ピサ県）在住が 84 人である。

高齢者センター/スクール	回答者数
ローマ	236
アンジェロ・エモ高齢者センター 第7区	18
ヨーロッパスクール 第6区	13
セルペンターラ高齢者センター 第4区	7
ダンテ・アリゲーリ文科高等学校 第17区	8
ゴッフレード・マメリ文科高等学校 第2区	7
サン・ビアージョ高齢者センター 第1区	
サン・サーバ高齢者センター 第1区	30
テスタッチョ高齢者センター 第1区	24
パンチョッティ ITIS スクール 第4区	5
ラブリオーラ理科高等学校 第13区	13
サン・クインティーノ高齢者センター 第1区	5
トリチェッロ理科高等学校 第18区	6
カシリーノ 23 高齢者センター 第7区	23
ティブルティーナ・アンティーカ通り 25 番地中学校 第3区	8
フェルミ ITIS スクール 第18区	15
サンドロ・ペルティーニ 第7区	54
ペッチョリ	84
参加者合計	320

ローマで行われているリクリエーション活動は次のもの：

- ↓ダンス
- ↓ボッチェ（ペタンク）の試合
- ↓カードゲーム
- ↓遠足
- ↓様々なテーマの集会
- ↓考古学講座
- ↓演劇の夕べ

センターでは他にも、以下のプロによるサービスが行われている。

- ↓歯医者
- ↓栄養士
- ↓理髪師

ペッチョリのサービスセンターで行われている活動：

- ↓ カードゲーム
- ↓ ビンゴゲーム
- ↓ 料理講座
- ↓ 運動
- ↓ 遠足

センターに通う人だけでなく、「お年寄り」以外の人でも参加できる活動：

- ↓ 英語およびスペイン語の講座
- ↓ ピサのお国言葉
- ↓ 情報処理講座
- ↓ 料理講座
- ↓ ビンゴゲーム
- ↓ 会食
- ↓ 遠足

## 高齢者の特徴

調査には60才からの高齢者も参加しており、図表1にあるように参加者の25%を占める。次に65才から69才までが23.8%と続く。80才から84才までは調査を受けた人の7.5%に過ぎず、84才を超える人は5.3%である。

調査を受けた女性の割合はサンプルの58.8%であり、男性は39.4%、無回答が1.9%である。

図表1a(ローマ)に関しては、最も高い割合は、65才以下(31.8%)であり、その次が65-69(24.6%)である。

最も低い割合なのが80-84才と84才以上の二つの年齢層である(両方とも3.4%)。

ペッチョリ(表1b)では、状況がかなり異なる。65才未満の割合(6%)はたいへん低い一方で、80-84才(19%)および84才以上(10.7%)がローマと比較して非常に高い。割合が最も高かったのは、70-74才(27.4%)である。

年齢層	女	%	男	%	N/A	合計	%
N/A	5	2,7				5	1,6
65歳未満	56	29,8	23	18,3	1	80	25,0
65-69	43	22,9	32	25,4	1	76	23,8
70-74	40	21,3	31	24,6	4	75	23,4
75-79	21	11,2	22	17,5		43	13,4
80-84	10	5,3	14	11,1		24	7,5
84 超	13	6,9	4	3,2		17	5,3
合計	188	100	126	100	6	320	100

図表 1 年齢と性別(サンプル合計)

年齢層	女	%	男	%	N/A	合計	%
N/A	3	2,1				3	1,3
65歳未満	52	37,1	22	24,4	1	75	31,8
65-69	32	22,9	25	27,8	1	58	24,6
70-74	27	19,3	21	23,3	4	52	22,0
75-79	17	12,1	15	16,7		32	13,6
80-84	3	2,1	5	5,6		8	3,4
84 超	6	4,3	2	2,2		8	3,4
合計	140	100	90	100	6	236	100

図表 1a 年齢と性別(ローマ)

年齢層	女	%	男	%	N/A	合計	%
N/A	2	4,2				2	2,4
65歳未満	4	8,3	1	2,8		5	6,0
65-69	11	22,9	7	19,4		18	21,4
70-74	13	27,1	10	27,8		23	27,4
75-79	4	8,3	7	19,4		11	13,1
80-84	7	14,6	9	25,0		16	19,0
84 超	7	14,6	2	5,6		9	10,7
合計	48	100	36	100	0	84	100

図表 1b 年齢と性別(ペッチョリ)

学歴に関しては、大学教育を受けた人がサンプルの6.9%である。

40.9%の人は小学校を、30.6%は中学校を卒業している。

図表 2a では、中学校を卒業した人の割合(36%)が最も高く、その次が小学校卒業(28.2%)である。ペッチョリのサンプル(表 2b)では、75%が小学校卒業である一方、大学卒業者は2.4%に過ぎない。高等学校卒業者の割合は少ない。

最終学歴	回答者数	%
小学校	131	40,9
中学校	98	30,6
高等学校	69	21,6
大学	7	2,2
5年制大学/師範学校/修士/博士	15	4,7
合計	320	100

図表 2 学歴(サンプル合計)

最終学歴	回答者数	%
小学校	68	28,8
中学校	85	36,0
高等学校	63	26,7
大学	6	2,5
5年制大学/師範学校/修士/博士	14	5,9
合計	236	100

図表 2a 学歴(ローマ)

最終学歴	回答者数	%
小学校	63	75,0
中学校	13	15,5
高等学校	6	7,1
大学	1	1,2
5年制大学/師範学校/修士/博士	1	1,2
合計	84	100

図表 2b 学歴(ペッチョリ)

同居者の数については、一人で暮らす人の割合がサンプルの 25.9%である。一方、最も高い割合を示すのは、配偶者、子またはそれ以外の親族と暮らす、同居者一人の場合である。2人あるいはそれ以上の人と暮らす人の割合もかなり高い (25.9%)

ローマでもピッチョリでも同じような結果である。ローマの回答者の 26.7%、ピッチョリの回答者の 23.8%が、一人で暮らしている。割合がもっとも高いのは、同居者一人の場合で、ローマでは 46.4%、ピッチョリでは 46.4%である。

同居者の数	回答者数	%
0	83	25,9
1	146	45,6
2 以上	83	25,9
無回答	8	2,5
回答者合計	312	97,5
参加者合計	320	100

図表 3 同居者の数 (サンプル合計)

(調査を受けた人をのぞく)

同居者の数	回答者数	%
0	63	26,7
1	107	45,3
2 以上	58	24,6
無回答	8	3,4
回答者合計	228	96,6
参加者合計	236	100

図表 3a 同居者の数 (ローマ)

(調査を受けた人をのぞく)



同居者の数	回答者数	%
0	20	23,8
1	39	46,4
2 以上	25	29,8
参加者合計	84	100

表 3b 同居者の数 (ペッチョリ)  
(調査を受けた人をのぞく)

### 健康状態

健康状態については、「良い」と「ふつう」が、回答の大部分を占めている。33.8%が「ふつう」と答え、27.8%が「良い」と答えた。「非常によい」と答えたのは、わずか5.9%であった。

ペッチョリのサンプルでは、「良い」の割合は低くなり (21.4%)、ローマの回答者の方が高い (30.1%)。

ペッチョリではと自分の健康を「あまり良くない」とする回答者の割合が非常に多い(25%)。

健康状態	女	%	男	%	N/A	合計	%
N/A	8	4,3	5	4,0	1	14	4,4
非常に良い	8	4,3	11	8,7		19	5,9
良い	38	20,2	47	37,3	4	89	27,8
ふつう	69	36,7	38	30,2	1	108	33,8
あまり良くない	43	22,9	18	14,3		61	19,1
良くない	22	11,7	7	5,6		29	9,1
合計	188	100	126	100	6	320	100

図表 4 健康状態(サンプル合計)

健康状態	女	%	男	%	N/A	合計	%
N/A	7	5,0	3	3,3	1	11	4,7
非常に良い	7	5,0	9	10,0		16	6,8
良い	30	21,4	37	41,1	4	71	30,1
ふつう	52	37,1	28	31,1	1	81	34,3
あまり良くない	31	22,1	9	10,0		40	16,9
良くない	13	9,3	4	4,4		17	7,2
合計	140	100	90	100	6	236	100

図表 4a 健康状態(ローマ)

健康状態	女	%	男	%	合計	%
N/A	1	2,1	2	5,6	3	3,6
非常に良い	1	2,1	2	5,6	3	3,6
良い	8	16,7	10	27,8	18	21,4
ふつう	17	35,4	10	27,8	27	32,1
あまり良くない	12	25,0	9	25,0	21	25,0
良くない	9	18,8	3	8,3	12	14,3
合計	48	100	36	100	84	100

図表 4b 健康状態(ペッチョリ)

介護に関する質問では、91%の人が、介護の必要がないと答えている。ピッチョリでは割合が下がり(80%)、ローマでは95%である。

介護に関する質問では、90%の人が、介護の必要がないと答えている。表 6a には、高齢者が誰から介護を受けているかが示されている。介護を利用している人の数は非常に少なく、また、介護を受けている人の介護者は、配偶者や同居していない子がほとんどである。

320人中わずか21人が、介護を受けていることを表明した。ローマでは7人、ペッ

チョリでは14人である。

一方、図表 7 は、介護を受けていない人に対する、必要が生じたときは誰に頼るかという質問の答えを示している。そのうち、47.1%が配偶者に、20.4%が同居していない子に、そして、12.9%がホームヘルパー/看護師に頼るだろうと答えている。

ローマのサンプルでは、47.8%が配偶者に、17.4%が同居していない子に、11.8%がホームヘルパー/看護師に頼るだろうと答えている。

ペッチョリでは、配偶者の割合が下がり (36.8%)、同居しない子の割合が上がる (26.3%)。そして、ホームヘルパー/看護師の割合もわずかではあるがより高い (14%)。

介護を利用していますか?	回答者数	%
介護を利用している	29	9
介護を利用していない/必要がない	291	91
合計	320	100

図表 5 介護(サンプル合計)

介護を利用していますか?	回答者数	%
介護を利用している	12	5
介護を利用していない/必要がない	224	95
合計	236	100

図表 5a 介護(ローマ)

介護を利用していますか?	回答者数	%
介護を利用している	17	20
介護を利用していない/必要がない	67	80
合計	84	100

図表 5b 介護(ペッチョリ)

誰の介護を受けていますか?	回答者数	%
配偶者	6	28,6
同居の子	3	14,3
同居の子の配偶者	0	0,0
同居していない子	4	19,0
同居していない子の配偶者	2	9,5
兄弟または姉妹	1	4,8
その他の親族	0	0,0
住み込みの介護者、看護師	3	14,3
老人ホーム	2	9,5
その他	0	0,0
合計	21	100

図表 6 介護を利用していると答えた人への質問(サンプル合計)

誰の介護を受けていますか?	回答者数	%
配偶者	4	57,1
同居の子	1	14,3
同居の子の配偶者	0	0,0
同居していない子	0	0,0
同居していない子の配偶者	1	14,3
兄弟または姉妹	0	0,0
その他の親族	0	0,0
住み込みの介護者、看護師	0	0,0
老人ホーム	1	14,3
その他	0	0,0
合計	7	100

図表 6a 介護を利用していると答えた人への質問 (ローマ)